# ≪資料紹介≫　森政三コレクション　円覚寺図面

上江洲安亨*3

## Ⅰ．はじめに

森政三（1895～1980）は、戦前の文部省技官で、1929（昭和 4）年の「国宝保存法」の制定以後、様々な国宝や重要文化財の調査や保存修理等に携わり、戦後も、日光東照宮の修復に長年携わった。日光東照宮以外にも、二荒山神社や、神王寺、長崎の大浦天主堂等の建造物の修復に携わっている。沖縄の文化財の修復・復元についても戦前・戦後と携わっている*2。その森政三が残していた写真・図面・拓本等のコレクションの中から、今回は戦前作成された円覚寺の各建造物の図面を紹介する。

森政三

戦前、沖縄調査時の写真。首里城二階御殿の物見で撮影

## Ⅱ．円覚寺図面

森政三コレクションに残された円覚寺の図面は七葉（以下、森図面と略す）あった。図面の画像を図１～７として紹介する。それぞれの図面には標題と縮尺が記されている。

図１ 一　圓覺寺総門平面圖　　縮尺二十分ノ一
図２ 二　圓覺寺放生橋平面圖　　縮尺五十分ノ一
図３ 三　圓円覺寺三門平面圖　　縮尺五十分ノ一
図４ 四　圓円覺寺鐘樓平面圖　　七　圓覺寺方丈平面圖　　縮尺三十分ノ一
図５ 五　圓覺寺佛殿平面圖　　縮尺五十分ノ一
図６ 六　圓覺寺開山堂平面圖　　縮尺五十分ノ一
図７ 八　圓円覺寺左脇門平面圖　縮尺三十分ノ一　九 圓覺寺右脇門平面圖　　縮尺三十分ノ一

森政三が円覚寺の図面を保管していた経緯や、図面の作製目的に関する記録は残されていないため不明であるが、森は1936（昭和11）年に守礼門の修理工事に携わっていたことから、文部省技官として、この図面を作製若しくは入手する機会があった可能性がある。円覚寺は、1933（昭和8）年に総門・放生橋・左掖門・右掖門・三門・鐘楼・仏殿・龍淵殿（方丈）・獅子窟（開山堂）が国宝指定されている。これまで円覚寺の伽藍配置や建物の名称の基礎情報となっていた田邊泰の『琉球建築』*3と図面表記（以下、田邊図面と略す）や名称が異なる部分もあるが、この森図面の七葉はいずれも国宝指定された建物の図面である。

森図面と田邊図面の図面表記が異なる部分を一部例示すると、三門前の石階段が田邊図面で12段となっているが図2の三門前図面では14段で図示され『琉球建築』で巌谷不二雄が撮影した写真でも14段となってお

---

1 一般財団法人沖縄美ら島財団　首里城公園管理部　事業課　事業課長
2 『首里城公園に関する調査研究・普及啓発事業年報』№10（平成 30 年度）　一般財団法人沖縄美ら島財団　2020 年 3 月
3 田邊泰『琉球建築』（座右宝刊行会　1972 年 10 月）

り、田邊の三門の解説にも階段は「14級」と記述されている。実際に三門階段の遺構は階段上部が破損しており不明瞭であるが、階段は13段ないし14段あるように思われる*[4]。

田邊図面では総門・放生橋・三門は東西に平行に図示されているが、図3を見ると、三門基壇正面（西面）の南北線が斜めになっており、建物の軸線が三門で少し折れている。実際に三門の遺構も同じように基壇の縁石が南方向にずれている*[5]。

図6は「開山堂」と表記され、前近代の史料や田邊泰の『琉球建築』にも同じ名称の建物の記録はないが、桁行・梁間とも三間の建物であるため獅子窟と思われる。田邊図面の仏殿北側に獅子窟が表記されており、同様の規模となっている。ただ田邊図面には内部奥の中央に須弥壇が示されているが、『琉球建築』の田邊の獅子窟の解説の記述には「内部は前面の三間二面が外陣、その奥の三間一面が内陣となり、内陣は全体須弥壇となっている。」（下線は筆者）とあり、図６の森図面とは一致する。

森図面と田邊図面の相違部分の比較をすると、森図面の方が古写真・遺構の実態に近い傾向にあるといえる。また、森図面中に表記されている寸法は尺寸法で書かれており、敷瓦（磚）が敷かれている部分や、平面図には壁や建具、格子等の具体的な表記もなされている。

田邊図面は、1934（昭和9）～1935（昭和10）年に二度にわたり沖縄全域の建築・芸術調査を行った際に、多くの史跡の一つとして建物の現状把握を目的として作製した図面であったと思われる*[6・7]。森が所蔵していた図面は、先述のとおり建物仕様の具体的な表記や寸法も記述されているので、おそらく国宝指定の検討時に建物の調査のために作製されたか、指定後に保存修理を行うため建造物の仕様・寸法を把握しようとした意図のもと作製された図面なのではないだろうか。森図面の作製経緯については今後の課題であるが、田邊図面よりも記述されている情報が具体的であることは、このような図面の作製目的の違いがあった可能性がある。

本稿では図面の公開を主として内容については簡易な紹介に留めたが、課題とした図面作製の経緯や図面に記録された情報の詳細な分析や考察等については別稿若しくは琉球・沖縄の歴史文化の研究者の活用に譲りたい。

円覚寺は周知の通り沖縄戦で灰燼に帰し、琉球政府時代の 1967（昭和 42）年に放生橋が修復され、1968（昭和 43）年に総門が復元されている。この森政三旧蔵の円覚寺図面は、現在、沖縄県教育庁が事業を進めている円覚寺三門の設計時に提供され活用されている。また三門以降の円覚寺復元整備の計画が具体化すれば、本論で紹介した通り、建物に関する具体的な記述がなされた図面であるため、円覚寺の各建物の形状・規模・空間等を把握できる貴重な資料として活用が期待されると思われる。

謝辞

本稿執筆にあたり、建築家の平良啓氏に様々な助言を頂いた。記して感謝の意としたい。

---

[4] 『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 107 集　円覚寺跡（3）－三門地区の遺構確認調査報告書－』（沖縄県立埋蔵文化財センター　2021 年 2 月）p22～24

[5] 4 に同じ。

[6] 3 に同じ。

[7] 福島清「ガラス乾板から見る『琉球建築』」（『首里城研究』№1　首里城研究会　1994 年 12 月）
田邊の『琉球建築』に掲載された写真は巌谷不二雄が技師として撮影している。詳細は福島論文を参照してほしい。

森政三コレクション中の円覚寺図面

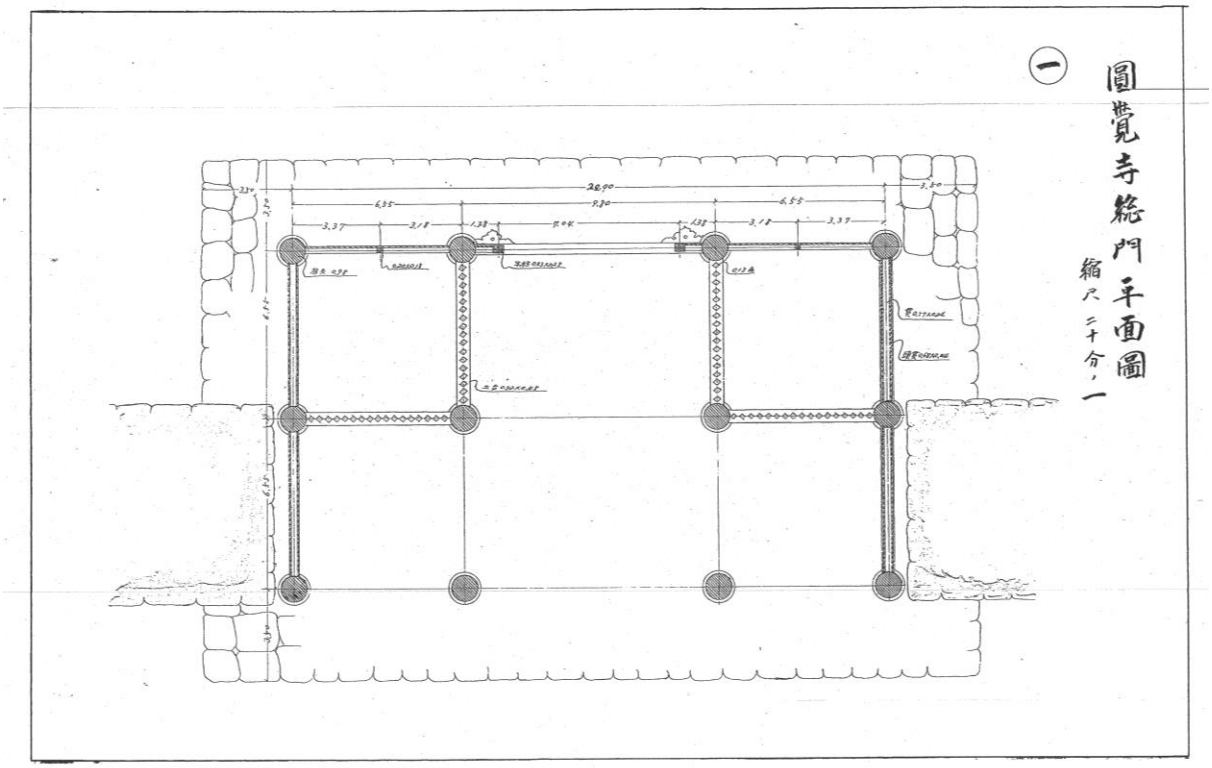


図１　一　円覺寺総門平面圖

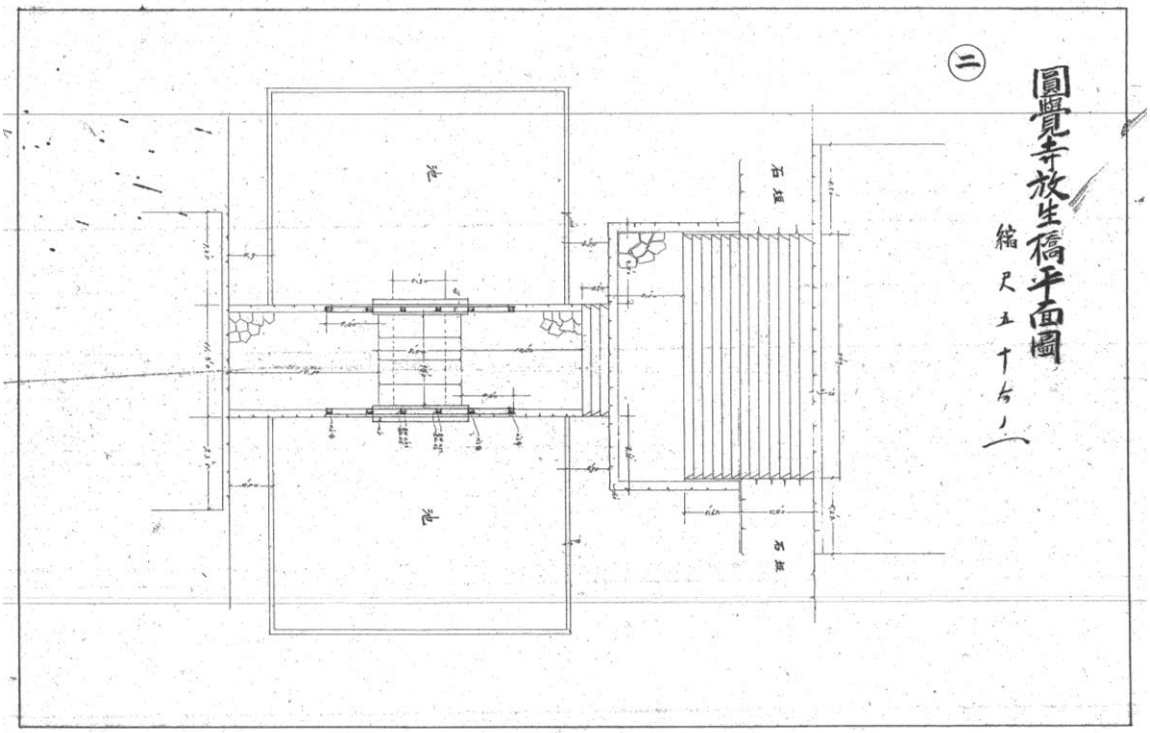


図２　二　円覺寺放生橋平面圖

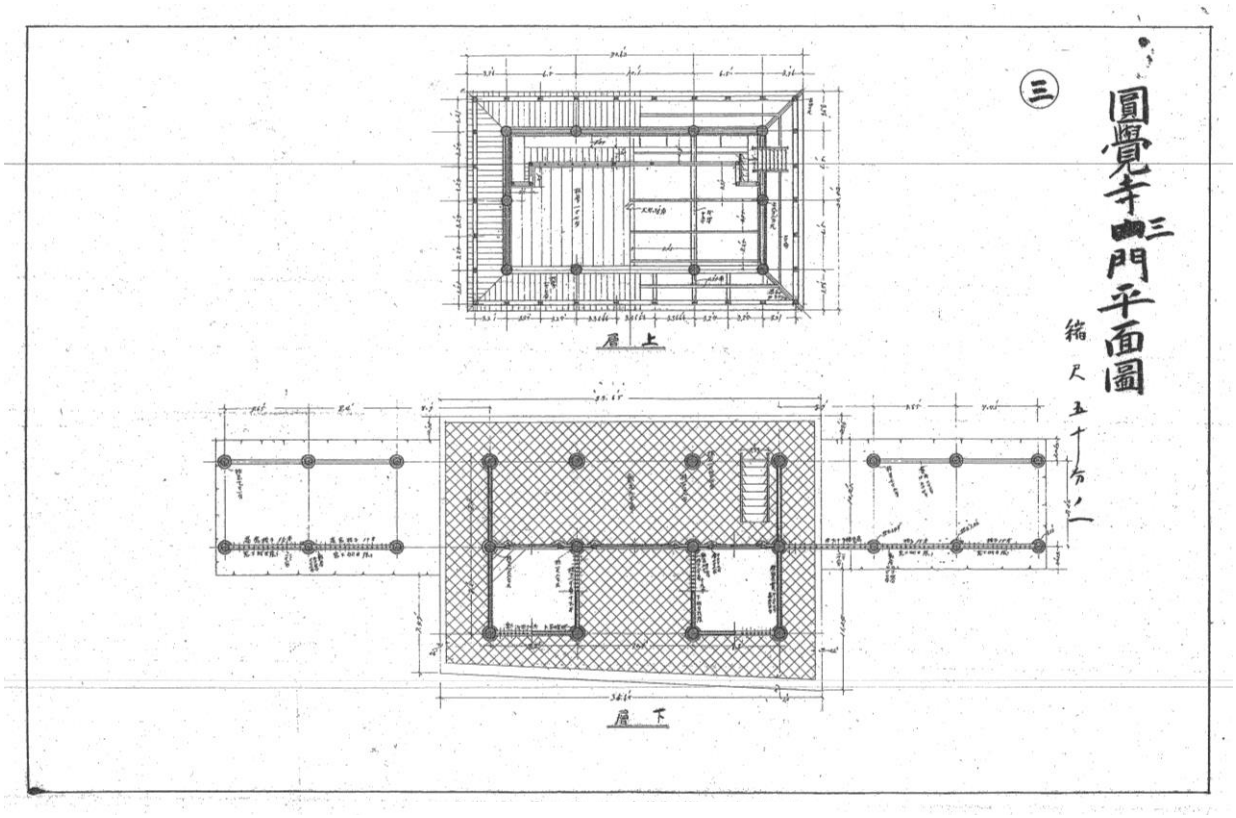


図３　三　円覺寺三門平面圖

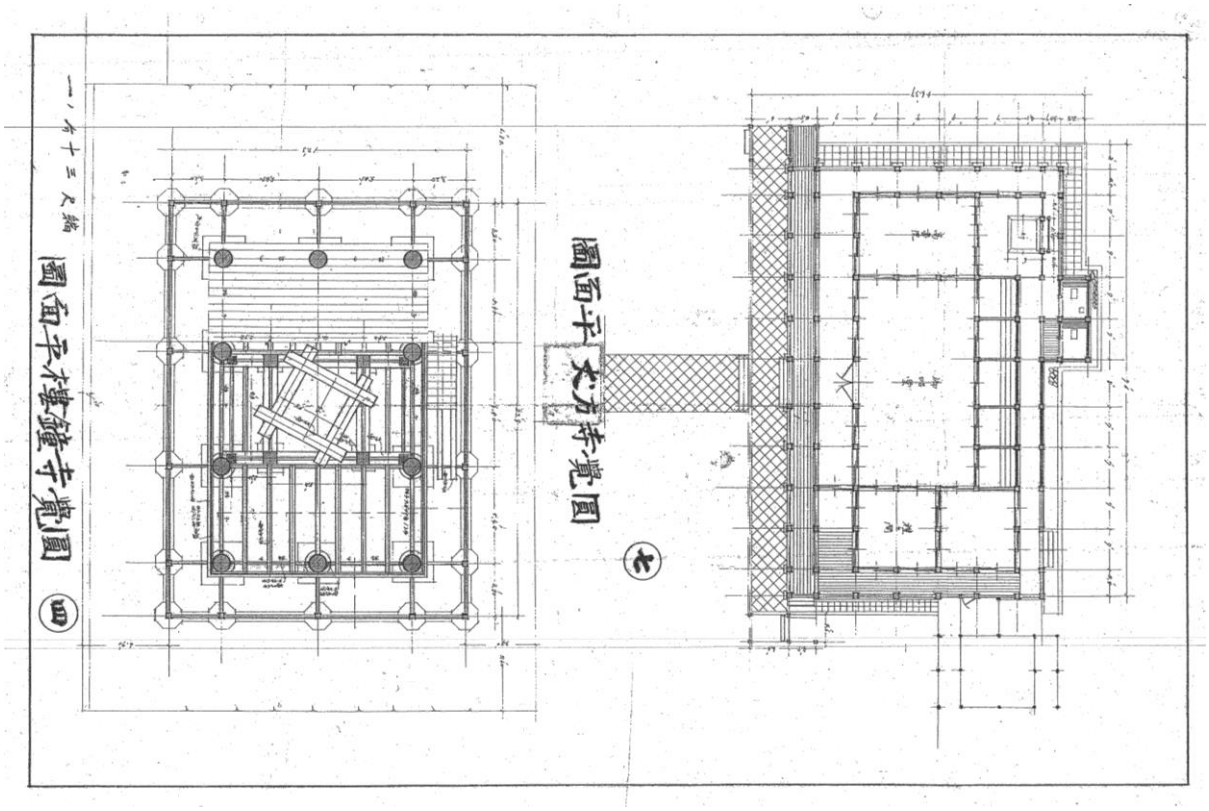


図４　四　円覺寺鐘楼平面圖　七　円覺寺方丈平面圖

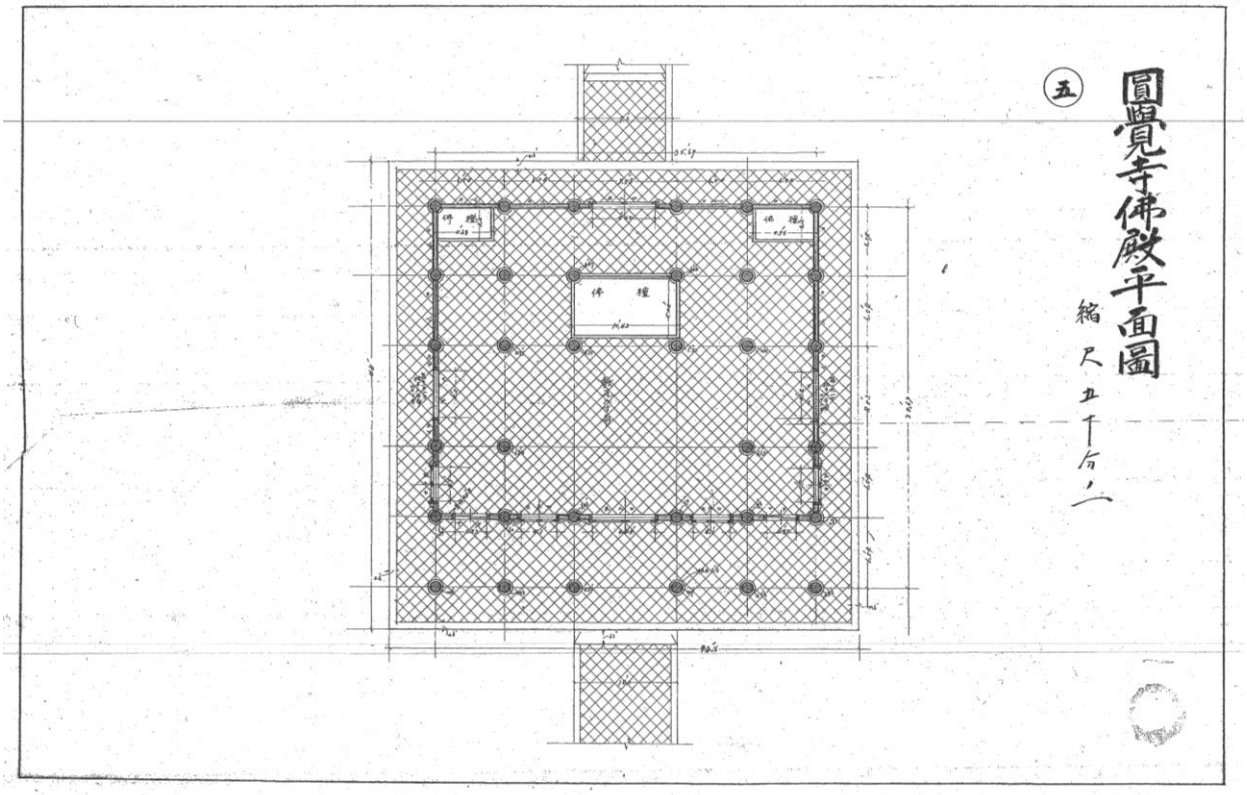


図 5　五　円覺寺佛殿平面圖

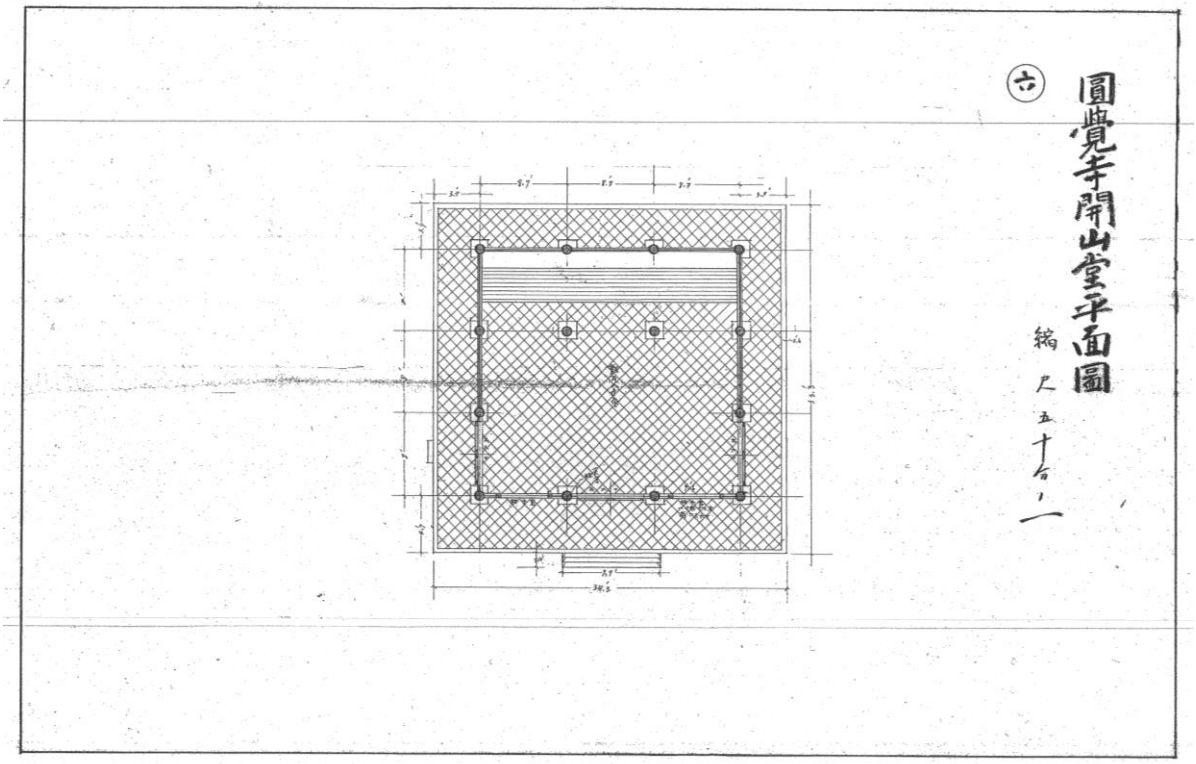


図 6　六　円覺寺開山堂平面圖

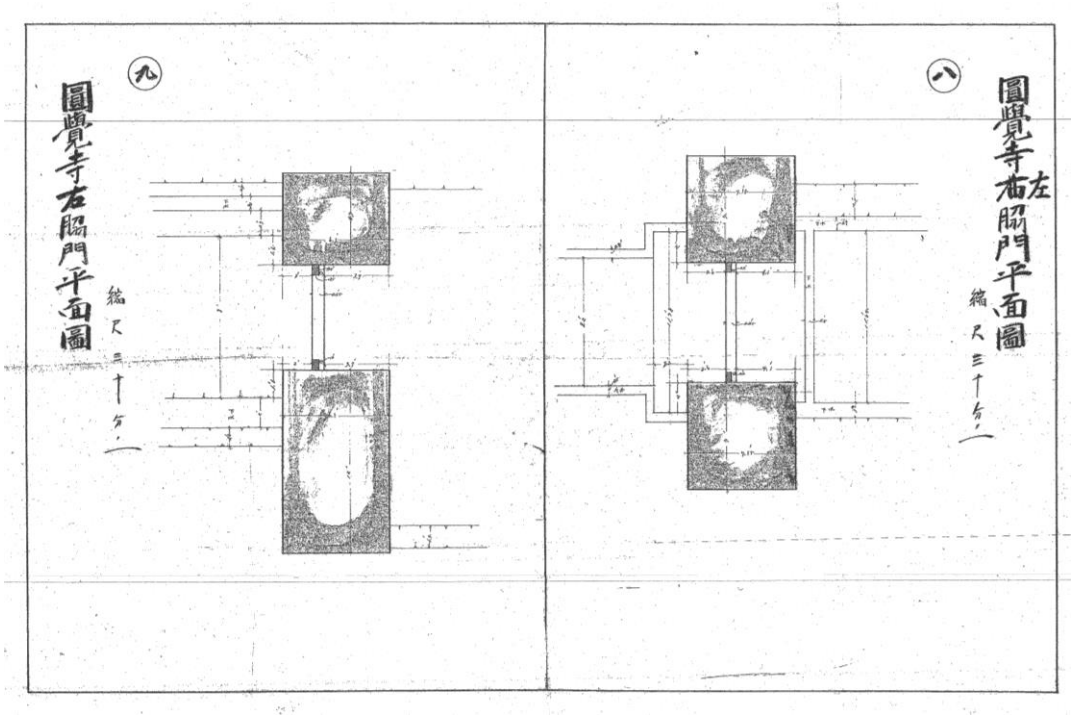


図７　八　円覺寺左脇門平面圖　九　円覺寺右脇門平面圖図